2012 年度立命館大学国際言語文化研究所　冬季企画Ⅱ　シンポジウム
「イディッシュ文学が遺したもの」

＜企画趣旨＞

「ホロコースト」の予感と余波（そして外傷）とともに 20 世紀文学の一角をになってきたイディッシュ文学を，いま研究することの意義を，アイザック・バシェヴィス・シンガー短篇集『不浄の血』の翻訳書（河出書房新社）刊行を契機に，あらためて考える場を設けたい。第二次世界大戦が引き裂いたヨーロッパ・ユダヤ人と在米ユダヤ人の苦悩の日々。イディッシュ文学が現代に遺した遺産とは何か？

日時：
　2013 年 3 月 24 日（日）14:00-17:30
場所：
　立命館大学衣笠キャンパス末川記念会館第 3 会議室
共催：
　立命館大学国際言語文化研究所，2012 年度研究所
　重点研究プロジェクト「カタストロフィと正義」

司　　会：西成彦（立命館大学），細見和之（大阪府立大学）
研究発表：樋上千寿（京都造形芸術大学非常勤講師）
　「シャガール作《アポリネール礼讃》の両性具有像について」
　鴨志田聡子（荒川区役所職員）[1)]
　「イディッシュ語の戦後――イスラエルの場合」
　赤尾光春（オックスフォード大学聖アントニーカレッジ客員研究員）[2)]
　「シオニストとしてのショレム・アレイヘム」
　飛鳥井雅友（立命館大学非常勤講師）
　「ハイーム・ナフマン・ビアリークにおけるヘブライ語とイディッシュ語」
　石光輝子（慶応義塾大学）
　「イディッシュと多言語共生」
　野村真理（金沢大学）
　「近親憎悪？　ウィーンのイディッシュ」

コメント：徳永恂（神戸・ユダヤ文化研究会代表），黒田晴之（松山大学）

付記

なお，シンポジウムでの発表原稿のうち，鴨志田聡子さん，赤尾光春さんのものについては，下記を参照されたい。

1）鴨志田聡子
『現代イスラエルにおけるイディッシュ語個人出版と言語学習活動』（三元社，2014年2月）

2）赤尾光春
「「シオン愛好家」としてのショレム・アレイヘム――イディシストとシオニストのはざまで」
『待兼山論叢：文学篇』第47号（大阪大学文学会，2014年3月刊行予定）